

湿潤な時間

つややかなフローリングに頬を当て
耳を澄ます

滴のひとつひとつを聞き分け
選り分けながら溶け込んでゆく

水...、さらには大気
そしてさらには静寂という生物へと

その透明な空間では
固体も流体も無作為が唯一の法則であるという

論理的な思考は何ものをも生まず
行列は固有値を有さない

床の向こうには湿潤な土がある
そして星がある

瞑想という名の搜索の網に掛かるはずはない
ひたすら掘削することでしか出会えぬ生物

それはこのフローリングのように
しっとりとした湿潤な時間に棲むのだ

この比類なき静寂という生物を
僕は飲んでしまいたい

(2001.9.10)